

△ 卷頭言 △

# 口と耳のことば

外山 滋比古

このごろのことばはおかしい。見られる、食べられる、着られる、と言うべきところを、見れる、食べれる、着れる、など、いわゆる「ら抜きことば」を使って平気である。若い人だけでなく、いい年の人までこういう違反を犯しているが、みんなの間違えはこわくない。だんだん「ら抜きことば」が当り前になり、おどろいていられなくなってきた。そういう大人の間で育つ幼児だから、はじめから「ら抜き」である。見られる、などと言おうものなら、舌がもつれる。

こどものことばの第一の先生は母親である。そのお母さんがむやみと早口で、大声でわめく。テレビがまげずにさげび、まくし立てる。こどもはそれにならって奇声を発する。わけもなく大声でどなる。

そして早口である。家庭はそれを何とも思っていないから、改めたくても改めようがない。

お母さんたちの発音がおかしい。こどもは母のことばで育つときまっているから、おかしい発音をするお母さんの子はおかしくなって当然。方言は決しておかしいことばではないが、親から子へ方言が伝承されてきたのも、母のことばだからである。

幼稚園の先生は、こどもにとつて、お母さんにつぐ第二の先生である。しかし、お母さん以上に大きな影響力をもつことがある。お母さんと幼稚園の先生とのことばが違うとき、こどもは先生のことばによりつよく引かれるようだ。

これはある言語学者のお嬢さんのはなし。幼稚園へ入ってしばらくすると、サ行の発音がおかしくな

り出した。シの音が正しく出ない。あわてたお父さんが矯正しようとしたけれども、うまくいかない。

学者のお父さんの言うことより幼稚園の言うことの方がつよい。お嬢さんはとうとうそのまま成人してしまった、とお父さんはなげいている。

幼稚園の先生はよほど話すことばに気をつけないと、こどもにとって一生とりかえしのつかないことになりかねない。そうことを自覚している先生がどれくらいいるだろうか。

ことばというと、すぐ、文字を書くことを考える。読ませたがる。何も知らない親たちがそう考えるのはしかたがないにしても、幼稚園までそれに引きずられて、小学校の真似ごとを始めたりしては細かい。

ことばは音声の基本である。ろくに話を聞くこともできないこどもに字を読ませて何になる。まっとうに話せない子に字を書かせてどうなるというのか。まず、話し聞くしつけをしつかりする。それに

は先生が、りっぱに話し、聞けなくては話にならないだろう。

大声をはりあげない。ゆっくり、はっきり、やさしく話す。実際に、幼稚園の先生はさすがにお母さんよりはまじだが、中にはお母さんがにわか幼稚園につとめるようになったのかと思われる若い先生がいる。先生とは言っても話す訓練を受けていないのだから、話せる先生でなくもしかたがないが、勉強は必要である。

こどもにはまたひとの話をきちんと聞くしつけが欠かせない。きく耳の弱いのはこどもに限らず日本人全体の欠点であるが、ことにお母さんたちはひとの言うことにおかまひなしで勝手なことをしゃべりまくる。そういう先生に育てられるこどもである。聞く耳をもっていたら、その方が不思議かもしれない。よく聞きわけられる耳を育てるのは、文字を読んだり書いたりするよりも幼児にとってはあるに大きな教育になる。

(昭和女子大学教授)